



Title	「ローマ書」におけるバルトの解釈学
Author(s)	宇都宮, 輝夫
Citation	基督教学, 12, 20-21
Issue Date	1977-07-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46332
Type	article
File Information	12_20-21.pdf



[Instructions for use](#)

『ローマ書』におけるバルトの
解釈学

宇都宮輝夫

カール・バルトの『ローマ書』の公刊を機縁として、従来の解釈学や新約聖書研究は、その課題や方法について、新たに問い直されることになった。それは、『ローマ書』が、近代神学とは異なる解釈学的方法を提示したためである。しかし、このことは、バルトが歴史的―批判的方法を排除し、その代りに靈的積義 (pneumatische Exegese) の立場を取ったという意味ではない。むしろ、彼は、聖書積義において、歴史的―批判的積義家以上に歴史的かつ批判的であろうとする。これが、『ローマ書』の解釈学の問題提起である。とすれば、バルトが聖書積義において志向する歴史性及び批判性ということ、何が意味されているのが重要な問題となる。

バルトによれば、近代の歴史主義は、自ら携えた可能・不可能に関する基準に則って、報告されている出来事を区別しつつ、テキストに接する。更に、そこにおい

ては、そのような自らの基準に従って、聖書テキストの背後にある人間的事象が再構成されたのである。彼にとつて、この課題と方法は、テキストの自己主張を阻止し、テキストを疎外することに他ならない。むしろ、積義は、先ず、可能・不可能に関して予め判断することなく、テキストが語っていることについて単純に知るということ、換言すれば、「そこに書かれていること」の確定でなければならぬ(この作業は、後に『教会教義学』において、観察と名付けられる)。歴史的―批判的聖書研究の課題は、テキストの背後に遡ることではありえず、むしろテキスト自体の言語的、文法的、論理的意味と連関の探究なのである。バルトの積義は、解釈学として一貫するために、厳密な観察を貫徹しようとする。具体的に言うならば、バルトは、テキストの自己主張を、通常の歴史概念からすれば不可能であり、また我々の理解にとつて異質であっても、その極めて奇異な、耐え難い詳細のまままで保持しようとするのである。バルトは、これを歴史的思惟と呼ぶが、「テキストに対する忠実」という彼の言葉も、この事柄を指示している。G・アイヒホルツとF・シュミットが、テキストに対するバルトのこの特徴的な態度を、「テキストの優位」(Vorrang des Textes)と

いう概念によって指摘していることは、優れた見識であると言えよう。

上述の議論においては、歴史的―批判的の思惟が重要であったが、次に問題となるのは、歴史的―批判的の思惟である。

バルトにとって、当時の歴史的―批判的の積義家は、聖書の語句を近代語に翻訳し、「そこに書かれていること」の確定だけで満足していた。あるいは、彼らは、高々、自らの偶然的立場に規定された宗教的思索の範疇（倫理性、感情、体験等）に基づいて、テキストを散発的に評価し、それによってテキストを理解し説明し終えたと考へる。それが出来ない箇所は、聖書記者の、時代に制約された見解であり、従って説明不可能なものと思はれるのである。それ故、その箇所は、近代的意識にとって躓きとなる時代史的残滓として、考究されず、理解されえないままに「残して」おかれることになる。

それに反して、バルトにとって、テキストの「本来の理解と説明」は、「そこに書かれていること」を学的に確定した上で、それを追考することによって成就する。つまり、具体的に言えば、積義は、テキストが提示している諸概念の内的緊張に出来る限り参与しつつ、テキスト

の語句を、テキストが語っている主題的事実 (Sache) に照らして解釈し、更に両者の関係を明らかにせねばならないのである。従って、追考においては、テキストと主題的事実の弁証法を通して、テキストの著者に対するぎりぎりの接近が試みられることになる。そして積義の正しさは、テキストを一節一節精密に探究し考量する中で、不条理に陥らず、テキストの内的統一の連関のうちに位置づけられるか否かによって、実践的ののみ証明されるのである。勿論、この実証は相対性の域を出ないのであり、バルトにとっても、純粹に客観的にテキストをして語らしめうる無謬の積義方法は存在しない。この「本来の理解と説明」、追考こそ、彼がテキストに対する批判と呼んだものであり、歴史的―批判的の積義は、それを断念してしまっていたのである。この意味で、彼には、歴史的―批判的の積義家は「もっと批判的でないならぬ」と思われたのである。

歴史的―批判的の積義は、事実に於ては、神学的の積義（バルトは自らの積義をそのように呼んでいる）ではないが、バルトの意図では、原理的には、前者は貫徹されて後者になるべきなのである。その限り、彼の解釈学的方法は、歴史的―批判的方法の徹底化であると言える。